Osaka University Knowledge Archive

Title	ティディム・チン語の適用構文
Author(s)	大塚, 行誠
Citation	人文学林. 2024, 1, p. 43-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95132
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ティディム・チン語の適用構文

大　塚　行　誠

Applicative Constructions in Tiddim Chin

OTSUKA Kosei

Abstract

Tiddim Chin, also known as Tedim Chin (ISO 639-3: ctd), is a Tibeto-Burman language spoken primarily in the border areas of Myanmar and India. The language employs various derivational processes to increase the valence of verbs, notably the use of applicatives, which introduce an additional argument into underlying intransitive or transitive clauses. This paper examines three productive applicative markers essential to Tiddim Chin: the benefactive suffix -sak³, the comitative suffix -piʔ³, and the relinquitive suffix -san³. A systematic analysis of those markers elucidates their crucial role and morphosyntactic properties in facilitating the formation of applicative constructions in the language. With those findings, the paper contributes to clarifying Tiddim Chin's unique structural intricacies.

キーワード：チベット・ビルマ語派，ヴォイス，適用態，充当態，他動詞化

1. はじめに

ティディム・チン語（Tiddim Chin/Tedim Chin）は，シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派のチン語支に属する（西田 1989: 995）。国際SIL（Summer Institute of Linguistics）の公開資料*Ethnologue*によれば，ミャンマー北西部およびインド北東部を中心に，約411,000人の母語話者がいる（Eberhard et al. 2022: 127, 285）。

本論文の執筆に際し，筆者はティディム・チン語で書かれた初等読本*Zolai Simbu*（以下，「ZS」と略）の分析と，ティディム・チン語の母語話者に対する聞き取り調査を行った。メイン・コンサルタントは，1980年代後半にミャンマーのチン州テディム（Tedim）で生まれ，ティディム・チン語を母語とする男性，パウ・シアン・リアン（Pau Sian Lian）氏である。

ティディム・チン語には，文章体（narrative style）と口語体（colloquial style）という二つ

の異なる文体が存在する（西田 1989: 997）。文章体はキリスト教聖書などのフォーマルな文章に使用される一方，口語体はもっぱらカジュアルな会話で用いられる（Henderson 1965: 2）。両文体における音韻と語彙は概ね共通しているが，文法の面で違いがある。以下の例（1）a. に文章体の文，例（1）b. に口語体の文を示す。例（1）を見ても分かる通り，文末の述語形式と人称標示法に違いが見られ，文章体においては述語の末尾に語彙的な意味をほとんど持たないコピュラ動詞 hi:^{3}(COP^{I}) を置くという特徴がある。但し，適用構文は，文末の述語形式と人称標示法を除けば，文体による顕著な差異が見られない。そこで，本論文では文章体を主な考察対象とするが，口語体の例も口語体であることを明記した上で適宜参照することにする。

		文章体				口語体	
(1)	a.	ka^{2}	pai^{2}	hi:^{3}	b.	pai^{2}	iŋ^{3}
		1	go^{I}	COP^{I}		go^{I}	1SG.REAL
		「私は行った。」（西田 1989: 997）				「私は行った。」（西田 1989: 997）	

ティディム・チン語の自動詞節の基本語順は「主語－述語動詞」であり，他動詞節の基本語順は「主語－目的語－述語動詞」である。以下の例（2）a. に自動詞 iʔ^{3}mu:^{2}「眠る」を述語として用いた文，例（2）b. に他動詞 ne:^{1}「食べる」を述語として用いた文を示す。ティディム・チン語は能格型の格配列をなし，名詞句に格助詞を後置することで様々な格を示すことができるほか，声調交替によって格を示すこともある（Henderson 1965: 69–71）。

(2)	a.	a^{3}	tu:^{1}	a^{1}	iʔ^{3}mu:^{2}	hi:^{3}	
		3	grandchild	3	sleep^{I}(vi)	COP^{I}	
		「彼の孫は眠っている。」（ZS0: 40）					
	b.	sa^{1}ham^{1}	in^{3}	ŋa^{1}sa:^{1}	a^{3}	ne:^{1}	hi:^{3}
		otter	ERG	fish	3	eat^{I}(vt)	COP^{I}
		「カワウソが魚を食べた。」（ZS1: 23）					

動詞の結合価を増加させる生産的な動詞接尾辞には，使役（causative）を表す接辞 -sak^{3}（§2.3）のほか，その使役接辞と同音の受益（benefactive）を表す接辞 -sak^{3}（§3.2），随伴（comitative）を表す接辞 -piʔ^{3}（§3.3），および放置（relinquitive[1)]）を表す接辞 -san^{3}（§3.4）がある。本論文では，Zam Ngaih Cing（2017）の記述に従い，受益接辞 -sak^{3}，随伴接辞 -piʔ^{3}，放置接辞 -san^{3} を

1）“relinquitive”という文法用語が適用態に関連する用語としてはじめて用いられたのは，Peterson（1998）のハカ・ライ語の他動詞化に関する記述である（Peterson 1998: 100–101）。その後，ダーイ・チン語（Hartmann-So 2009: 199）やシザン・チン語（Davis 2017: 37–38），ティディム・チン語（Zam Ngaih Cing 2017: 184）など，チン語支の研究においては，適用態の一種を指す用語として一般的に使われるようになった。

まとめて適用態標識（applicative marker）と呼ぶことにする。どの適用態標識も基本的には動詞の取りうる目的語の数を一つ増やす統語的機能を持っている。

ティディム・チン語の初等読本では，例 (3) のような随伴接辞 -piʔ³ を用いた文や例 (4) のような放置接辞 -san³ を用いた文がよく見られる。このような適用態を表す構文，すなわち適用構文（applicative construction）は，生産的に使われていることが分かる。以下の例 (3) と例 (4) の太字の部分が適用態標識である。

(3) tʰan³ki:k³ in³ a³ mei¹ toʔ³ tʰa:ŋ¹ a¹ siaʔ³ leʔ³ sa¹xi:² xat³ o:k¹ a:²
chameleon ERG 3 tail COM trap 3 set^inv CNJ deer one be.caught^I CNJ
sa¹xi:² in³ a¹ leʔ³lam¹ in² a¹ ta:i³**-piʔ³** hi:³
deer ERG 3 opposite.direction INS 3 run^II-COM.APPL COP^I
「カメレオンが尻尾で罠を仕掛けると，一匹の鹿が引っかかり，
鹿は（カメレオンを）道連れにして逆の方向に駆けていった。」（Henderson 1965: 5）

(4) a³ ne:u¹ la:i² un² a³ pa:¹ in³ siʔ³**-san³** a:²
3 small^I still PL.CNJ 3 father ERG die^II-RELINQ.APPL CNJ
a³ nu:¹ in³ pa³sal¹-daŋ¹ a¹ deiʔ³ ki:k¹ hi:³
3 mother ERG man-different^I 3 like^inv again COP^I
「彼らはまだ小さい頃父に死なれ，母はまた別の男が好きになった。」（ZS4: 32）

本論文では，適用構文の形態統語的特徴と用法に注目し，詳細な記述と考察を行う。

本論文の構成は次の通りである。次章では適用態に関連する文法事項として，人称標示（§2.1），動詞語幹の形式（§2.2），および結合価の増減（§2.3）について概説する。第３章では，ティディム・チン語における適用態の特徴（§3.1）を述べた上で，受益接辞 -sak³（§3.2），随伴接辞 -piʔ³（§3.3），および放置接辞 -san³（§3.4）の形態統語的特徴および基本的な用法について記述する。最後に本研究のまとめと今後の研究課題について述べ，本論文の結論とする。

2. 適用態に関連する文法事項

2.1. 人称標示

ティディム・チン語の文章体において，人称および数は，人称代名詞，人称接語，そして方向接辞の一種である来辞 hoŋ¹- [2] を用いて表現する。人称代名詞は自由形態素であり，人称接語

2）口語体では，oŋ¹- という形式がよく用いられる（Otsuka 2022: 201–205）。

と方向接辞は拘束形態素である。人称接語は名詞句や述語動詞の前に付け，所有者や主語の人称を示す。人称接語には一人称複数包括形の i，一人称複数包括形以外の一人称を示す ka，二人称の na，三人称の a があり，各人称接語の声調は原則として後続する要素の声調によって決まる。複数を示す際は，一人称複数包括形の i の場合を除き，名詞句（例 (5) a. 参照）や述語動詞（例 (5) b. 参照）の後に複数を示す人称接語 uʔ³ を置く。以下の例 (5) の太字の部分が人称接語である。

(5) a. **ka²** sia² te:¹ **uʔ³**
1 teacher PL PL
「私たちの先生方」(ZS2: 2)

b. la:i³-hilʔ³ zoŋ³ **a³** siam¹ **uʔ³** hi:³
letter-teach^{inv} also 3 clever^{I} PL COP^{I}
「彼らは教えるのも上手だ。」(ZS2: 2)

ティディム・チン語には，同系統のハカ・ライ語に見られるような目的語の人称を示す人称接語（Peterson 2017: 263–264）が無い。しかし，Otsuka（2022: 201–205）によれば，被動者や受領者に話し手や聞き手などの発話行為参与者が含まれている場合（一人称または二人称の目的語を取る場合），来辞 hoŋ¹- を述語動詞の前に必ず付加しなければならない（例 (6) 参照）。この来辞 hoŋ¹- には人称接語と融合した形があり，一人称の人称接語 ka と来辞 hoŋ¹- の融合形 koŋ¹-，二人称の人称接語 na と来辞 hoŋ¹- の融合形 noŋ¹- がよく用いられる（例 (7) 参照）。なお，三人称の人称接語 a と来辞 hoŋ¹- が共起する場合，人称接語 a は通常省略される。以下の例 (6) と例 (7) の太字の部分が来辞である。

(6) pa³sian³ in³ **hoŋ¹-**i:t¹ a:² **hoŋ¹-**ke:m³ hi:³
God ERG VEN-love^{I} CNJ VEN-look.after^{I} COP^{I}
「神は我々を愛し，見守ってくださる。」(ZS2: 16)

(7) na:u²ŋe:k¹ **noŋ¹-**ciʔ³ la:i² leʔ³ suaŋ¹ in² **koŋ¹-**de:ŋ² di:ŋ¹ hi:³
baby 2.VEN-say^{II} still CNJ stone INS 1.VEN-throw.at^{I} PURP COP^{I}
「君が僕のことを赤ん坊とまだ言うのなら僕は君に石を投げるだろう。」(ZS3: 32)

適用態標識を用いた他動詞節においても同様の文法現象が見られる。適用態標識の受益接辞 -sak³（例 (8) 参照），随伴接辞 -piʔ³（例 (9) 参照），放置接辞 -san³（例 (10) 参照）を動詞に付加すると，その動詞の結合価は増え，受益者，随伴者，被放置者といった意味役割を持つ項が新

たな目的語として文中に導入される。その新たな目的語が一人称または二人称である場合にも，来辞 hoŋ¹- を述語動詞の前に付加しなければならない。以下の例 (8) から例 (10) の太字の部分が来辞と適用態標識である。

(8) **koŋ¹-**mat³**-sak³** hi:³
1.VEN-catch^{II}-BEN.APPL COP^{I}
「私はあなたのために（それを）捕まえた。」(Henderson 1965: 85)

(9) lian³ in³ kei¹ **hoŋ¹-**va:k³**-piʔ³** hi:³
PN ERG 1SG VEN-walk^{II}-COM.APPL COP^{I}
「リアンは私と一緒に歩いた。」

(10) ka³ pa:¹ in³ kei¹ **hoŋ¹-**iʔ³mut³**-san³** hi:³
1 father ERG 1SG VEN-sleep^{II}-RELINQ.APPL COP^{I}
「私の父は私を放っておいて寝た。」

2.2. 動詞の語幹形式

一つの動詞が二つの語幹形式を持つという形態的な特徴は，チン語支の多くの言語で報告されている（Hillard 1974, VanBik 2009: 10–16）。ティディム・チン語においても，多くの動詞は「形式Ⅰ（Form I）」および「形式Ⅱ（Form II）」と呼ばれる二つの語幹形式を有しており，様々な形態統語的条件によって，語幹形式が交替する（Henderson 1965: 72–89）。但し，両形式の区別が無い不変形（invariant form）の動詞も少なからず存在する。

主節の述語には通常，形式Ⅰの動詞が用いられるため，形式Ⅰのほうが動詞の無標の形式と見なされる。一方，有標の形式Ⅱは，主に名詞的な従属節で用いられ，動詞によっては名詞化（例 (11) 参照）や他動詞化（例 (12) 参照）といった派生の役割を果たすこともある。

		形式Ⅰ		形式Ⅱ	
(11)	a.	pa:u²「話す」	b.	pa:u³「言葉」	名詞化
(12)	a.	dam²「健康だ」	b.	dam³「健康にする」	他動詞化

名詞修飾においても動詞の語幹形式は交替しうる。被修飾名詞と名詞修飾節中の述語動詞との統語関係によって名詞修飾節中の述語動詞の語幹形式が決まる（大塚 2020: 303）。すなわち，被修飾名詞が名詞修飾節中の主語であれば，名詞修飾節中の述語動詞は形式Ⅰで現れる。一方，被修飾名詞が名詞修飾節中の主語でなければ，名詞修飾節中の述語動詞は形式Ⅱで現れる。

名詞修飾における語幹形式の交替を以下の（13）の例を用いて説明する。例（13）a. における中動態接辞 ki³- は他動詞 gou³「屠る」（形式Ⅰ）に付くことで動作主を伴わない受動を表す（大塚 2023: 166–168）。そのため，例（13）a. の被修飾名詞 sial²「ミタン牛」は名詞修飾節中の述語動詞 ki³-gou³「屠られた」（形式Ⅰ）の主語となり，名詞修飾節中の述語動詞は形式Ⅰで現れる。一方，例（13）b. の被修飾名詞 sial²「ミタン牛」は名詞修飾節中の述語動詞 goʔ³「屠る」（形式Ⅱ）の目的語にあたり，主語ではない。そのため，名詞修飾節中の述語動詞は形式Ⅰの gou³「屠る」ではなく，形式Ⅱの goʔ³「屠る」が用いられる。

（13） a. sial² ki³-gou³
mithan MID-slaughter^{I}
「（誰かに）屠られたミタン牛」（Henderson 1965: 89）

b. ka² sial² goʔ³
1 mithan slaughter^{II}
「私が屠ったミタン牛」（Henderson 1965: 88）

2.3. 結合価の増減

結合価を減らす形態的操作には，中動態接辞 ki³- の付加がある。この接辞 ki³- は，自動詞や他動詞の述語に付加することで，再帰文や相互文，動作主非表示の文，動作主を伴わない受動文などを形成する（大塚 2023）。適用態標識の受益接辞 -sak³（例（14）参照），随伴接辞 -piʔ³（例（15）参照），放置接辞 -san³（例（16）参照）はどれも中動態接頭辞 ki³- と共起しうる。以下の例（14）から例（16）の太字の部分が中動態標識と適用態標識である。

（14） i² lu:² **ki³**-et³-**sak³** ni:³ ［口語体の例］
1PL.INCL head MID-look^{II}-BEN.APPL 1PL.INCL.IRR
「私たちは，（虱がいるかどうか）互いの頭を見せあおう。」

（15） sial² **ki³**-pai³-**piʔ³** mo:³ ［口語体の例］
mithan MID-go^{II}-COM.APPL SF
「（誰かが）ミタン牛を連れて行ったんだね。」

（16） kou³ bek¹ hoŋ¹-**ki³**-ta:i³-**san³** hi:³
1PL only VEN-MID-run^{II}-RELINQ.APPL COP^{I}
「（人々は）私たちだけを残して走り去った。」

結合価を増やす形態的操作には幾つかの種類がある。頭子音の有気性の対立（例 (17) 参照）や動詞の語幹形式の交替（例 (18) 参照）による自他交替（causative alternation）もあるが，そのような形態的操作は現代ティディム・チン語において生産的ではない。

		自動詞		他動詞
(17)	a.	pu:k^{1}「倒れる」	b.	p^{h}u:k^{1}「（木を）倒す」
(18)	a.	dam^{2}「健康だ」	b.	dam^{3}「健康にする」（例 (12) の再掲）

結合価を増やす生産的な操作には，使役標識 -sak^{3} または適用態標識 -sak^{3}/-piʔ^{3}/-san^{3} の付加がある。このうち，適用態標識は動詞語幹の形式Ⅱのみに接続可能である。

使役接辞 -sak^{3} は自動詞（例 (19) 参照）と他動詞（例 (20) 参照）のどちらにも付加することができる。使役接辞の付加により，動詞が本来取る項のほかに使役者の項が新たな主語として加わる。以下の (19) は自動詞に使役接辞を付加した例，(20) は他動詞に使役接辞を付加した例である。使役者は能格で示し，被使役者は絶対格（ゼロの形式）で示す。

(19) sa:i^{2}ciŋ^{1}pa:^{1} in^{3} a^{1} deiʔ^{3} baŋ^{3} in^{2} sa:i^{2}
elephant.keeper ERG 3 like^{inv} alike^{I} CNJ elephant
a^{1} lum^{3}-sak^{3} a^{3} t^{h}ou^{1}-sak^{3} a^{2} diŋ^{2}-sak^{3} t^{h}ei^{3} hi:^{3}
3 lie.down^{I}-CAUS 3 get.up^{I}-CAUS 3 stand^{I}-CAUS able^{I} COP^{I}
「象使いは意のままに象を寝かせ，起こし，立たせることができる。」（ZS2: 33）

(20) pu^{1}-tuan^{3} in^{3} ki:^{1}kim^{2} mo:^{2}to:^{2} a^{2} ho:l^{2}-sak^{3} hi:^{3}
grand.father-PN ERG PN car 3 drive^{I}-CAUS COP^{I}
「トゥアンさんはキーキムに車を運転させた。」

以下の例 (21) は間接的な使役を表している。人間だけではなく，「木」や「雨」などの有生性の低いものも使役者や被使役者となりうる。

(21) siŋ^{1}kuŋ^{1} in^{3} guaʔ^{3} tam^{1}pi:^{1} (a^{1}) zu^{3}-sak^{3} t^{h}ei^{3} hi:^{3}
tree ERG rain much 3 rain^{I}-CAUS able^{I} COP^{I}
「木は雨をたくさん降らすことができる。」（ZS2: 5）

§2.1 で述べた通り，他動詞節では，被動者や受領者が発話行為参与者（話し手や聞き手）である場合，つまり，他動詞述語が一人称や二人称の目的語を取る場合は，来辞 hoŋ^{1}- を述語動

詞に付加する必要がある。この文法規則は使役接辞 -sak³ を用いた使役構文にも適用される。被使役者が発話行為参与者である場合，すなわち，使役接辞を伴う述語動詞が一人称または二人称の目的語を取る際も同様に来辞 hoŋ¹- を付加する必要がある（例 (22) 参照)。

(22) lian³ in³ (kei¹) ui¹ hoŋ¹-beŋ¹-sak³ hi:³
PN ERG 1SG dog VEN-scare.away^{I}-CAUS COP^{I}
「リアンは私に犬を追い返させた。」

以下の (23) から (27) の例文は全て Zam Ngaih Cing（2017）による口語体のティディム・チン語の文であり，原文を本論文の発音表記とグロス表記に書き換えたものである。これらの例文が示す通り，動詞の結合価を増やす形態的操作としては，使役接辞 -sak³ のほかに，適用態標識の付加がある。適用態標識には，受益接辞 -sak³（例 (23) と (24) 参照)，随伴接辞 -piʔ³（例 (25) 参照)，そして放置接辞 -san³（例 (26) 参照）がある。Zam Ngaih Cing（2017）は，これらの適用態標識が動詞が取りうる目的語の数を一つ増やすと指摘しており，その具体例として (25) と (26) を挙げている。

但し，Zam Ngaih Cing（2017）の記述には注意すべき点もある。例えば，例 (24) は，意味的には典型的な受益文とは言えないのだが，その点についての説明が十分になされていない。さらに，例 (27) の助動詞 xo:m³「共に行う」を，形式 I の動詞を取る例外的な適用態標識だとしている点は，筆者の考えと異なる。Zam Ngaih Cing（2017）は xo:m³ がハカ・チン語の「追加受益（additional benefactive)」(Peterson 2017: 268）を表す適用態標識 -tseʔm と機能が似ていることから適用態標識の一種だと主張しているが，結合価の増加も見られない。したがって，これを適用態標識と呼ぶのは適切ではないと考え，本論文の考察対象から外すことにした。

(23) niaŋ²pi:¹ in³ a³ nu:¹ puan¹za:² di:ŋ¹ lei³-sak³ [口語体の例]
PN ERG 3 mother shawl PURP buy^{II}-BEN.APPL
「ニアンピーは，母に肩掛けを買ってあげた。」(Zam Ngaih Cing 2017: 182)

(24) ui¹ in³ na:u²ŋe:k³ an¹ ne:k¹-sak³ [口語体の例]
dog ERG baby.GEN food eat^{II}-BEN.APPL
「犬が赤ん坊のご飯を食べてしまった。」(Zam Ngaih Cing 2017: 182)

(25) a. lian^{3}xa:i^{2} lam^{1}pi:^{1} aʔ^{3} pai^{2}-suk^{3} [口語体の例]
PN road LOC go^{I}-downward^{inv}
「リアンカーイは，道を下って行った。」(Zam Ngaih Cing 2017: 183)

b. lian^{3}xa:i^{2} in^{3} a^{2} na:u^{2}nu:^{1} lam^{1}pi:^{1} aʔ^{3} pai^{3}-piʔ^{3}-suk^{3} [口語体の例]
PN ERG 3 little.sister road LOC go^{II}-COM.APPL-downward^{inv}
「リアンカーイは，妹を連れて道を下って行った。」(Zam Ngaih Cing 2017: 183)

(26) a. gin^{3}pu:^{2} in^{1} aʔ^{3} ciaʔ^{3} [口語体の例]
PN house LOC return.home^{inv}
「ギンプーは，家に帰った。」(Zam Ngaih Cing 2017: 184)

b. gin^{3}pu:^{2} in^{3} a^{2} ni:^{2} in^{1} aʔ^{3} ciaʔ^{3}-san^{3} [口語体の例]
PN ERG 3 aunt house LOC return.home^{inv}-RELINQ.APPL
「ギンプーは，叔母を残して家に帰った。」(Zam Ngaih Cing 2017: 184)

(27) ka^{3} in^{1}ve:ŋ^{2}-pa:^{1} in^{3} ka^{3} siŋ^{1} di:ŋ^{1} zoŋ^{3} pua^{1}-xo:m^{3} [口語体の例]
1 neighbor-male ERG 1 tree PURP also carry^{I}-together^{I}
「私の近所の男性は，私の使う木も一緒に運んだ。」(Zam Ngaih Cing 2017: 184)

以下の章では受益接辞 -sak^{3}，随伴接辞 -piʔ^{3}，放置接辞 -san^{3} のいずれかを持つ適用構文の形態統語的特徴と用法に焦点を当て，より詳細な記述と考察を行う。

3. 適用構文

3.1. 適用態の特徴

古賀 (2015) によると，適用態とは，本来動詞の必須項ではない斜格語を目的語という文法関係に対応付けるヴォイス（態）である（古賀 2015: 18)。例えば，アイヌ語には例 (28) のような場所を表す文において適用構文（例 (28) a. 参照）と非適用構文（例 (28) b. 参照）のペアが見られる（Shibatani 1996: 159)。例 (28) a. の適用構文では，動詞 horari「住む」に適用態標識としての接辞 e- を付加することで場所を表す語 cise「家」を目的語に昇格している。一方，例 (28) b. の非適用構文では，cise「家」に後置詞 ta「～に」を付加することで，斜格句として場所を表している。

(28) a. Poro cise e-horari ［アイヌ語の例］
big house APPL-live
「彼は大きい家に住んでいる。」(Shibatani 1996: 159)

b. Poro cise ta horari ［アイヌ語の例］
big house in live
「彼は大きい家に住んでいる。」(Shibatani 1996: 159)

Dixon and Aikhenvald (2000: 13–14) と Peterson (2007: 39) による適用態の定義をふまえると，適用態は概ね以下の文法的特徴を持つものと考えられる[3)]。

(a) 自動詞節は適用態を用いると他動詞節になる。他動詞節は適用態を用いると他動性が維持されるものの，元の他動詞節の場合とは異なる意味役割の項が目的語として加わる。
(b) 適用態を用いると自動詞節のSはAになり，他動詞節のAはAのままで維持される。
(c) 通常は斜格の周辺的な項が，適用態を用いることで，目的語（中核項）に昇格する。
(d) 適用構文は，動詞への接辞の付加などの生産的な形態的操作によって形成される。

上の (a) から (d) の特徴のほか，ティディム・チン語では，「適用態標識は，形式Ⅱの動詞にのみ接続される」という形態的な特徴も加わる。

チン語支の複数の言語の文法記述で適用態標識の存在が報告されている。ティディム・チン語（Zam Ngaih Cing 2017: 182–184）のみならず，同じ北部チン諸語のシザン・チン語（Davis 2017: 37–38），中部チン諸語のミゾ語（Chhangte 1993: 101–102）とハカ・ライ語（Peterson 2017: 267–268），そして南部チン諸語のダーイ・チン語（Hartmann-So 2009: 197–202）などにも適用態標識が見られる。特に，ハカ・ライ語やダーイ・チン語には，道具を表す適用態標識（instrumental applicative）をはじめ，ティディム・チン語には見られない類の適用態標識もある。しかし，受益，随伴，放置を表す適用態標識は，形式的な違いこそあるものの，ティディム・チン語，シザン・チン語，ミゾ語，ハカ・ライ語，そしてダーイ・チン語に共通して見られる（図1参照）。

3) Dixon and Aikhenvald (2000) には「他動詞節においてもともと目的語であった項は，適用態を用いることで文の中核項から外れ，周辺的な項になるか省略される」という旨の記述も見られる (Dixon and Aikhenvald 2000: 14)。一方，Peterson (2007) による適用態の通言語的な研究ではこの点を適用態の定義として挙げていない (Peterson 2007: 39)。

図1　チン語支の諸言語における適用態標識の例

言語名	受益	随伴	放置
ティディム・チン語	-sak³	-piʔ³	-san³
シザン・チン語（Davis 2017: 38）	-sâk	-pûi:	-sân
ミゾ語（Chhangte 1993: 102）	-sak	-pûy	-sàn
ハカ・ライ語（Peterson 2017: 267–268）	-piak	-pii	-taak
ダーイ・チン語（Hartmann-So 2009: 198）	-pee:t/pe	-püi	-taa:k/ta

アイヌ語の適用構文の例（28）a. にもあるように，通常斜格やその他の手段で表される周辺的な項が，適用構文においては主要な項に昇格する（Dixon and Aikhenvald 2000: 13–14, Peterson 2007: 39）。しかし，Peterson（2007）の適用態に関する包括的な記述からも分かるように，適用構文は言語によってその特徴が異なる。適用構文に対応する非適用構文が存在しないケースや，ある特定の表現では適用構文しか用いられないというケースも見られる。

ハカ・ライ語では，随伴接辞 -pii を動詞に付加することによって適用構文になり，随伴者が目的語として扱われる（例（29）a. 参照）。この場合には，随伴者を周辺的な項で表す非適用構文も存在する（例（29）b. 参照）。しかし，受益接辞 -piak や放置接辞 -taak を用いた適用構文の場合，受益者や被放置者を周辺的な項で表すような非適用構文は無い（Peterson 2007: 45）。

（29）a.　ka-law　ʔan-ka-thloʔ-pii　［ハカ・ライ語の例］
1SG.POSS-field　3PL.SBJ-1SG.OBJ-weed^{II}-COM.APPL
「彼らは私と私の畑の草むしりをした。」（Peterson 2007: 45）

b.　kaymaʔ　hee　ka-law　ʔan-thlaw　［ハカ・ライ語の例］
1SG　COM　1SG.POSS-field　3PL.SBJ-weed^{I}
「彼らは私と一緒に私の畑の草むしりをした。」（Peterson 2007: 45）

ティディム・チン語も同様である。すなわち，随伴接辞 -piʔ³ を用いた適用構文（例（30）a. 参照）にはそれに対応する非適用構文（例（30）b. 参照）がある。一方で，受益接辞 -sak³ や放置接辞 -san³ を用いた適用構文には，受益者や被放置者が周辺的な項として表されるような非適用構文が無い。但し，コンサルタントによれば，随伴接辞 -piʔ³ を用いた適用構文と共格助詞 toʔ³ を用いた非適用構文とでは若干の意味の違いがあり，特に適用構文では「一緒にしてあげる」といった裨益のニュアンスも生じるそうである（例（30）a. 参照）。この語用の細かい違いについては今後の研究課題として，本論文では詳しく扱わないことにする。

(30) a. lian³ in³ nu¹-ha:u³ an¹ a³ ne:k¹-piʔ³ hi:³
PN ERG aunt-PN food 3 eat^{II}-COM.APPL COP^{I}
「リアンはハーウさんと一緒にご飯を食べてあげた。」
b. lian³ in³ nu¹-ha:u³ toʔ³ an¹ a³ ne:¹ hi:³
PN ERG aunt-PN COM food 3 eat^{I} COP^{I}
「リアンはハーウさんとご飯を食べた。」

使役接辞 -sak³ と適用態標識の受益接辞 -sak³ は同形であるが，接続する動詞語幹の形式によって機能が異なる。例 (31) a. では使役接辞 -sak³ を用いた文を示し，例 (31) b. では適用態標識の受益接辞 -sak³ を用いた文を示す。どちらの例も -sak³ という同形の接辞を使用しているが，接続する動詞語幹の形式が異なっている。

(31) a. (ken³) na³ lou¹ koŋ¹-xou¹-sak³ hi:³
1SG.ERG 2 field 1.VEN-cultivate^{I}-CAUS COP^{I}
「私はあなたにあなたの畑を耕させた。」
b. (ken³) na³ lou¹ koŋ¹-xoʔ³-sak³ hi:³
1SG.ERG 2 field 1.VEN-cultivate^{II}-BEN.APPL COP^{I}
「私はあなたのためにあなたの畑を耕してあげた。」(Henderson 1965: 85)

しかし，§2.2 で述べた通り，ティディム・チン語には動詞語幹の形式Ⅰと形式Ⅱの区別が無い不変形（invariant form）の動詞もある。例えば，silʔ³「着る」のような動詞は形式Ⅰと形式Ⅱの区別が無いため，例 (32) に示す通り，この文だけでは使役構文と適用構文のどちらの解釈を取るべきか不明である。そのため，前後の文脈からどちらの意味なのかを判断しなければならない。

(32) a¹man³ na³ puan¹ hoŋ¹-silʔ³-sak³ hi:³
3SG.ERG 2 clothes VEN-wear^{inv}-CAUS?BEN.APPL? COP^{I}
「彼は，（私に／あなたに）あなたの服を着せた。」 [使役構文]
「彼は，あなたの（着ようとしていた）服を着た。」 [適用構文]

また，適用態標識は形式Ⅱの動詞にのみ接続するため，二つの適用態標識が共起すると，例 (33) のように二通りの解釈が可能な文も生じる。受益接辞 -sak³ と使役接辞 -sak³ が共起することはないが，随伴接辞 -piʔ³ または放置接辞 -san³ が受益接辞 -sak³ または使役接辞 -sak³ と共起することはある。その場合，接辞 -sak³ が使役接辞なのか，受益接辞なのかがあいまいになる。

この場合も，やはり前後の文脈を参照して意味を判断するしかない。

(33) nu¹-ha:u³ in³ lian³pi:¹ a¹ pai³-piʔ³-sak³ hi:³
aunt-PN ERG PN 3 go^{II}-COM.APPL-CAUSʔBEN.APPLʔ COP^{I}
「ハーウさんは，（誰かと）リアンピーに行かせた。」 [使役構文]
「ハーウさんは，（誰かのため）リアンピーと行ってあげた。」 [適用構文]

さらに，先の §2.2 でも述べた通り，名詞修飾節中では統語的条件によって形式Ⅱの動詞が現れることもある。具体的には，被修飾名詞が名詞修飾節中の主語ではない場合には，名詞修飾節中の述語動詞の語幹は形式Ⅱを取る。例 (34) では，被修飾名詞 an¹「ご飯」が名詞修飾節中の目的語であり，主語ではないことから，名詞修飾節中の「作る，料理する」という意味の述語動詞は形式Ⅰの huan¹ ではなく，形式Ⅱの huan³ という形で現れる。この統語的な要因による語幹形式の交替によって名詞修飾節中の接辞 -sak³ が使役接辞なのか，受益接辞なのかがあいまいになる。この場合も，前後の文脈を参照しながら意味を判断する必要がある。

(34) lian³ in³ lian³pi:¹ a¹ huan³-sak³ an¹ a³ om¹ la:i² hi:³
PN ERG PN 3 cook^{II}-CAUSʔBEN.APPLʔ food 3 exist^{I} still COP^{I}
「リアンがリアンピーに作らせたご飯がまだあった。」 [使役構文]
「リアンがリアンピーに作ってあげたご飯がまだあった。」 [適用構文]

次の節から受益接辞（§3.2），随伴接辞（§3.3），放置接辞（§3.4）のそれぞれの用法を順に見ていく。

3.2. 受益接辞 -sak³

以下に示す例 (35) a.，(36)，(37) は，他動詞に受益接辞 -sak³ を付加した文である。受益接辞 -sak³ を形式Ⅱの述語動詞に付加することにより，主語の指示対象が目的語の指示対象に代わって動作を行うことを表す。受益接辞 -sak³ の付加で導入される新たな項は主に被代行者を示す（例 (35) a. 参照）。例 (35) a. の適用構文に対応する形で，被代行者を周辺的な項で表す非適用構文は無い。但し，受益接辞を用いずに例 (35) a. の適用構文と近い意味で敢えて言い換えると，例 (35) b. のような文になる。

(35) a. pu¹-tuan³ in³ ki:¹kim² mo:²to:² ho:l³-sak³ [口語体の例]
grand.father-PN ERG PN car drive^{II}-BEN.APPL
「トゥアンさんはキーキムの代わりに車を運転してあげた。」

b. pu¹-tuan³ in³ ki:¹kim³ ta:ŋ¹ a:² mo:²to:² ho:l² [口語体の例]
grand.father-PN ERG PN.GEN delegate CNJ car drive^{I}
「トゥアンさんはキーキムの代理で車を運転した。」

適用態標識 -sak³ の付加によって導入される新たな項は文脈によっては受益者（例 (36) 参照）や被害者（例 (37) 参照）としても解釈される。本論文では，いくつかの解釈が可能な適用態標識 -sak³ を，これと同様の機能を持つハカ・ライ語の受益接辞 -piak（Peterson 1998: 96–97, Peterson 2017: 267–268）の記述にならい，受益接辞と呼ぶことにした。

(36) pa³lik³ te:¹ in³ a³ nu:¹ a¹ sap³-sak³ hi:³
police PL ERG 3 mother 3 call^{II}-BEN.APPL COP^{I}
「警察は（彼の為に）彼の母親を呼んであげた。」(ZS3: 30)

(37) ka² lo:m²pa:¹ ga:l² te:¹ in³ hoŋ¹-tʰaʔ³-sak³ hi:³
1 male.friend enemy PL ERG VEN-kill^{II}-BEN.APPL COP^{I}
「私の男友達は敵に殺されてしまったのだ。」(ZS2: 23)

形式Ⅱの自動詞にも受益接辞 -sak³ を付加することはできるが，その場合，受益者項の名詞句を絶対格で示すことはできない。つまり，適用態標識 -sak³ を付加しても，新たに導入される項は目的語に相当する中核項ではない。ゆえに，例 (38) c. は非文となる。但し，「～のため」を意味する助詞 di:ŋ¹ を用いて受益者を明示する方法はある（例 (38) b. 参照）。例 (35) a. の他動詞を用いた適用構文も，例 (39) のように助詞 di:ŋ¹「～のため」を用いて言い換えることができる。

(38) a. nu¹-ha:u³ zum³ aʔ³ a² pai² hi:³
aunt-PN office LOC 3 go^{I} COP^{I}
「ハーウさんは役所へ行った。」

b. lian² a:¹ di:ŋ¹ a:² nu¹-ha:u³ in³ zum³ aʔ³ a¹ pai³-sak³ hi:³
PN.GEN own PURP CNJ aunt-PN ERG office LOC 3 go^{II}-BEN.APPL COP^{I}
「リアンのためにハーウさんは役所へ行ってあげた。」

c.* nu¹-ha:u³ in³ lian³ zum³ aʔ³ a¹ pai³-sak³ hi:³
aunt-PN ERG PN office LOC 3 go^{II}-BEN.APPL COP^{I}

(39) pu^{1}-tuan^{3} in^{3} ki:^{1}kim^{3} a:^{1} di:ŋ^{1} a:^{2} mo:^{2}to:^{2} a^{1} ho:l^{3}-sak^{3} hi:^{3}
grand.father-PN ERG PN.GEN own PURP CNJ car 3 drive^{II}-BEN.APPL COP^{I}
「トゥアンさんはキーキムのために車を運転してあげた。」

3.3. 随伴接辞 -piʔ^{3}

随伴接辞 -piʔ^{3} を形式Ⅱの自動詞（例(40)および(42)参照）または他動詞（例(41)参照）に付加すると，動詞の結合価が増加する[4)]。適用構文において新たに導入される中核項（すなわち目的語）は，随伴者（例(40) b. および(41) b. 参照）または付帯物（例(42) b. 参照）を示す。随伴接辞 -piʔ^{3} を付加することで，主語の指示対象が新たな目的語の指示対象を随伴もしくは付帯しながら動作を行うことを表す。

(40) a. ga:l^{2}ka:p^{1}-ma:ŋ^{2}pa:^{1} a^{2} pai^{2} hi:^{3}
soldier-officer 3 go^{I} COP^{I}
「将校は行った。」

b. ga:l^{2}ka:p^{1}-ma:ŋ^{2}pa:^{1} in^{3} sum^{2}bu:k^{1}pa:^{3} ta^{1}pa:^{3} a^{1} pai^{3}-piʔ^{3} hi:^{3}
soldier-officer ERG shop.owner.GEN son 3 go^{II}-COM.APPL COP^{I}
「将校は店主の男の息子を連れて行った。」(ZS4: 71)

(41) a. lian^{3} in^{3} an^{1} a^{3} ne:^{1} hi:^{3}
PN ERG food 3 eat^{I} COP^{I}
「リアンはご飯を食べた。」

b. lian^{3} in^{3} nu^{1}-ha:u^{3} an^{1} a^{3} ne:k^{1}-piʔ^{3} hi:^{3}
PN ERG aunt-PN food 3 eat^{II}-COM.APPL COP^{I}
「リアンはハーウさんと一緒にご飯を食べてあげた。」

(42) a. a^{1}maʔ^{3} a^{1} in^{1} aʔ^{3} a^{1} ciaʔ^{3} hi:^{3}
3SG 3 house LOC 3 return.home^{inv} COP^{I}
「彼は家に帰った。」

b. a^{1}man^{3} tua^{2} be:l^{2}-sia^{1} a^{3} in^{1} aʔ^{3} a^{1} ciaʔ^{3}-piʔ^{3} hi:^{3}
3SG.ERG DEM pot-damaged^{I} 3 house LOC 3 return.home^{inv}-COM.APPL COP^{I}
「彼はその壊れた壷を家に持ち帰った。」

4) 本論文の論旨から外れるため詳細な記述は省くが，随伴接辞と同形の接辞に同一集団に属する者を表す名詞接辞 -piʔ^{3} (-member) がある。具体例としては，a^{3} in^{1}kuan^{3}-piʔ^{3} te:^{1} (3 family-member PL)「彼の家族の人たち」(Henderson 1965: 157)，ka^{3} xo^{1}-piʔ^{3} (1 village-member)「私の村の者」，na^{3} sa:ŋ^{1}-piʔ^{3} (2 school-member)「あなたの学校の人」，i^{3} mi^{1}-piʔ^{3} (1PL.INCL people-member)「我が民族の人」などがある。

3.4. 放置接辞 -san³

放置接辞 -san³ を形式Ⅱの自動詞または他動詞に付加することにより，動詞の結合価が増加する。適用構文において新たに導入される中核項（すなわち目的語）は，有生物（例(43) b. および(44) b. 参照）または無生物（例(45) b. 参照）の被放置者を示す。放置接辞 -san³ の付加により，主語の指示対象が新たな目的語の指示対象を放置したまま動作を行うことを表す。例(43) b. の適用構文に対応する非適用構文（周辺的な項を用いた表現）は無いが，適用態標識を用いずに例(43) b. の適用構文と近い意味で言い換えるとすれば，例(43) c. のような複文になるだろう。

(43) a. nu¹-ciŋ² a² ta:i² hi:³
aunt-PN 3 run^{I} COP^{I}
「チンさんは，走り去った。」

b. nu¹-ciŋ² in³ lian³ a¹ ta:i³-san³ hi:³
aunt-PN ERG PN 3 run^{II}-RELINQ.APPL COP^{I}
「チンさんは，リアンを残したまま走り去った。」

c. nu¹-ciŋ² in³ lian³ nu¹sia³ in³ a² ta:i² hi:³
aunt-PN ERG PN leave.behind^{I} CNJ 3 run^{I} COP^{I}
「チンさんは，リアンを後に残して走り去った。」

(44) a. ken³ an¹ ka³ ne:¹ hi:³
1SG.ERG food 3 eat^{I} COP^{I}
「私はご飯を食べた。」

b. ken³ nu¹-kim² an¹ ka³ ne:k¹-san³ hi:³
1SG.ERG aunt-PN food 1 eat^{II}-RELINQ.APPL COP^{I}
「私はキムさんをおいてご飯を食べた。」

(45) a. a¹maʔ³ a¹ iʔ³mu:² hi:³
3SG 3 sleep^{I} COP^{I}
「彼は眠った。」

b. a¹man³ a³ tu:i¹-suan³ a¹ iʔ³mut³-san³ hi:³
3SG.ERG 3 water-put.on.the.fire^{II} 3 sleep^{II}-RELINQ.APPL COP^{I}
「彼は沸かしたお湯を放置したまま眠りについた。」

4．まとめ

本論文では，ティディム・チン語に，受益接辞 -sak³，随伴接辞 -piʔ³，および放置接辞 -san³ の三つの適用態標識があることを指摘した。そして，それぞれの形態統語的特徴と基本的な用法について，適用態に関連する文法事項と共に記述した。

適用態とは，通常，動詞の必須項として現れない周辺的な項を目的語という文法関係に対応付けるヴォイスである（古賀 2015: 18）。適用態は，チン語支に限らず，日本のアイヌ語（Ainu, Shibatani 1996: 159），インドネシアのトゥカン・ベシ語（Tukang Besi, Donohue 1999: 225），ケニアのブクス語（Bukusu, Peterson 2007: 6）など，世界各地の言語でも観察されている。本論文は，言語系統の枠を超えて，世界の様々な言語に見られる適用態について，通言語的な議論を展開する上での基礎的な言語資料となるだろう。

ティディム・チン語の適用態標識は，動詞の結合価を増加させ，新たな目的語を導入する生産的な接辞として機能している。そして，本研究では受益接辞 -sak³ の付加が被代行者，受益者，被害者といった様々な意味役割を持つ項の増加をもたらすことが分かった。一方，ティディム・チン語の適用態には，一般的な適用態の定義と異なる特徴があることも指摘した。例えば，自動詞に受益接辞 -sak³ を付加する場合は受益者項を目的語（絶対格名詞句）として示すことができないほか，受益接辞 -sak³ や放置接辞 -san³ を用いた適用構文には，受益者や被放置者を周辺的な項として表す非適用構文が存在しないことも分かった。

今後の研究課題として三つの課題が挙げられる。はじめに，適用構文と非適用構文の違いをさらに精査する必要がある。例えば，コンサルタントは，例（46）a.（例（30）a. の再掲）の随伴接辞 -piʔ³ を用いた適用構文と例（46）b.（例（30）b. の再掲）の共格助詞 toʔ³ を用いた非適用構文のペアにおいて，両者の間に意味の違いがあると指摘していた。しかし，本研究ではその違いについてまでは明らかにすることができなかった。

（46） a. lian³ in³ nu¹-haːu³ an¹ a³ neːk¹-piʔ³ hiː³
PN ERG aunt-PN food 3 eat^{II}-COM.APPL COP^{I}
「リアンはハーウさんと一緒にご飯を食べてあげた。」（例（30）a. の再掲）

b. lian³ in³ nu¹-haːu³ toʔ³ an¹ a³ neː¹ hiː³
PN ERG aunt-PN COM food 3 eat^{I} COP^{I}
「リアンはハーウさんとご飯を食べた。」（例（30）b. の再掲）

第二の研究課題は，適用構文がどのような動機や要因から生じるのかを明らかにすることである。そのためにも，今後は，多くの言語資料を参照しつつ，形態統語論だけでなく，語用論の観点も取り入れながら，更なる分析を進めていく必要があるだろう。

最後に，チン語支の諸言語における適用態標識を比較対照し，その相違点及び共通点を記述することも今後の課題としたい。ティディム・チン語だけでなく，周辺地域の言語との対照を試みることで，適用態標識の発展過程に関する通時的な分析も可能になるだろう。

適用態標識の機能と用法を理解することは，ティディム・チン語のヴォイスを記述する上で非常に重要である。したがって，今後は以上の研究課題を念頭に置きながら，継続的な調査を進め，ティディム・チン語の文法全体に対する理解を一層深めていきたいと考えている。

本論文におけるティディム・チン語の表記方法

ティディム・チン語にはラテン文字による正書法がある。しかし，正書法の表記では音韻上重要な声調および母音の長短を正確に書き表すことができない。そこで，本論文ではHenderson（1965: 9–14）の記述を基にした以下の音素表記を用いる。

ティディム・チン語の音節構造は，音節全体に被さる声調を /T とし，丸括弧で囲んだ要素を非必須要素とすれば，（C1）V（C2）/T と表すことができる。このうち，頭子音音素（C1）は /p, t, k, b, d, g, pʰ, tʰ, s, x［x~kʰ］, h, c［tɕ］, v, z, l, m, n, ŋ/ であり，末子音音素（C2）は /m, n, l, ŋ, p, t, k, ʔ, lʔ［lʔ］/ である。但し，借用語やオノマトペでは頭子音 /ch［tɕʰ］, j［dʑ］, f / が現れる場合もある。母音 Vの位置に現れうる単独母音には /i, iː, e［e/ɛ］, eː［ɛː］, a, aː, o［o/ɔ］, oː［ɔː］, u, uː/ があり，短母音音素の /e/ と /o/ は音節末または声門閉鎖の末子音 /ʔ/ の前ではそれぞれ［ɛ］と［ɔ］という音声で実現する。さらに，二重母音 /ia, ua, iu, iːu, ei, eːi［ɛːi］, eu, eːu［ɛːu］, ai, aːi, au, aːu, oi, oːi［ɔːi］, ou, ui, uːi/ や三重母音 /iai, uai, iau, uau/ が母音 V の位置に現れることもある。

声調素（T）は三つある。本論文では Henderson（1965: 19–20）の声調に関する記述をもとに，各音節末に[1]「第1声調」，[2]「第2声調」，[3]「第3声調」という声調番号を付している（Henderson 1965: 19–20）。ティディム・チン語における声調は「短音節」と「長音節」という二種類の音節に分けて記述する必要がある。すなわち，（a）短母音で終わる開音節，（b）短母音と無声の末子音 -p/-t/-k で終わる閉音節，（c）無声の末子音 -ʔ で終わる閉音節という三つのタイプの音節を「短音節」と呼び，その他の音節を「長音節」と仮に呼ぶことにする。単音節のレベルで見ると，長音節の第1声調は上昇［˥˩］，第2声調は平板［˧］，第3声調は下降［˩］の音調曲線で現れる。一方，短音節の第1声調は高音［˥］，第3声調は低音［˩］で実現する。

語や句が連続する場合，連読変調が生じることもあり，一つの声調素が条件によって様々な音調曲線で実現する。例えば，第2声調の長音節の後に第3声調が続くとその第3声調は長音節の場合高音からの下降［˥˩］，短音節の場合高音［˥］のピッチで現れる。また，上昇の音調曲線が連続して現れる場合は後部の音節を高く平らな音調曲線［˥］で発音し，逆に下降の音調曲線が連続して現れる場合は後部の音節を低く平らな音調曲線［˩］で発音する傾向がある。このほ

か，声調交替や句および節の単位で起こる様々なイントネーションもあるが，詳細はHenderson（1965）を参照されたい。

略語一覧

1: 1st person, 2: 2nd person, 3: 3rd person, ^{1}: tone 1, ^{2}: tone 2, ^{3}: tone 3, -: morphological boundary, ^{I}: form I（verb stem）, ^{II}: form II（verb stem）, A: agent-like argument of canonical transitive verb, APPL: applicative, BEN: benefactive, C: consonant, CAUS: causative, CNJ: conjunction, COM: comitative, COP: copula, DEM: demonstrative, ERG: ergative, GEN: genitive, INCL: inclusive, INS: instrumental, ^{inv}: invariant form, IRR: irrealis, LOC: locative, MID: middle voice, OBJ: object, PL: plural, PN: proper noun or personal name, POSS: possessive, PURP: purposive, REAL: realis, RELINQ: realinquitive, S: single argument of canonical intransitive verb, SBJ: subject, SF: sentence-final marker, SG: singular, T: tone, V: vowel / verb, VEN: venitive, vi: intransitive verb, vt: transitive verb, ZS: Zolai Simbu（Tedim Chin/Tiddim Chin Primer）.

謝辞

本調査のメイン・コンサルタントであり，私の大切な親友でもあるティディム・チン語母語話者のパウ・シアン・リアン氏（Pau Sian Lian）に心より感謝の意を表する。本研究は，JSPS科研費 17K13442, 20H01256, 21K00480の助成を受けている。

参考文献

Chhangte, Lalnunthangi（1993）Mizo Syntax. Ph.D. Dissertation, University of Oregon.

Davis, Tyler（2017）Verb stem alternation in Sizang Chin narrative discourse. M.A. thesis, Payap University.

Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald（eds.）（2000）*Changing Valency: Case Studies in Transitivity.* Cambridge: Cambridge University Press.

Donohue, Mark（1999）*A Grammar of Tukang Besi.*（Mouton Grammar Library, 20）. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.

Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig（eds.）（2022）*Ethnologue: Languages of Asia.* Twenty-Fifth Edition. Dallas: SIL International.

Hartmann-So, Helga（2009）. *A descriptive grammar of Daai Chin.*（STEDT Monograph Series #7）. Berkeley: University of California.

Henderson, Eugénie J. A.（1965）*Tiddim Chin: A Descriptive Analysis of Two Texts*.（London Oriental Series, 15.）London: Oxford University Press.

Hillard, Edward J.（1974）Some aspects of Chin verb morphology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 1（1）: 178–185.

古賀裕章（2015）「ヴォイス（態）」斎藤純男・田口善久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』17–18. 東京: 三省堂.

西田龍雄（1989）「チン語支」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）『言語学大辞典　世界言語編（中）』2: 995–1008. 東京：三省堂.

大塚行誠（2020）「ティディム・チン語の名詞修飾表現」プラシャント・パルデシ・堀江薫（編）『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』303–322. 東京：ひつじ書房.

Otsuka, Kosei（2022）Directional Prefixes in Tiddim Chin. In: Shintaro Arakawa and Takumi Ikeda（eds.）*Grammatical phenomena of Sino-Tibetan languages*（*Function of Directional Prefixes*）3: 197–210. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University.

大塚行誠（2023）「ティディム・チン語の中動態標識ki³- に関する覚書」『言語文化研究』49: 153–172.

Peterson, David A.（1998）The morphosyntax of transitivization in Lai（Haka Chin）. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 21（1）: 87–153.

——（2007）*Applicative constructions.* New York: Oxford University Press.

——（2017）Hakha Lai. In: Graham Thurgood and Randy J. LaPolla（eds.）, *The Sino-Tibetan Languages*, 258–276. 2nd edition. London & New York: Routledge.

Shibatani, Masayoshi（1996）Applicatives and Benefactives: A Cognitive Account. In: Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson（eds.）*Grammatical Constructions: Their form and meaning*, 157–194. Oxford: Clarendon Press.

VanBik, Kenneth（2009）*Proto-Kuki-Chin: A Reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin Languages.*（STEDT Monograph Series #8）. Berkeley: University of California.

Zam Ngaih Cing（2017）A Descriptive Grammar of Tedim Chin. Ph.D. Dissertation, North-Eastern Hill University.

言語資料

本研究では，ミャンマーのヤンゴンおよびチン州テディムで制作・発行された五冊の初等読本（幼稚園課程と小学校課程向けの教科書）を用いた。これらの初等読本は，ティディム・チン語読本委員会（Zolai Simbu Komiti）によって制作・発行されたものである。

各読本に対して識別用のIDを割り当て，本論文で例文を引用する際には，IDとページ番号

を併記した。具体的には，1972年に発行された幼稚園課程用の読本には「ZS0」，小学1年生用の読本には「ZS1」，小学2年生用の読本には「ZS2」，1987年に発行された小学3年生用の読本には「ZS3」，小学4年生用の読本には「ZS4」というIDをそれぞれ割り当てている。原文はティディム・チン語のラテン文字正書法で書かれているが，本論文では，上述の音素表記とグロス表記に筆者が書き換えたものを言語データとして掲載している。